

健常ドライバーにおける運転時の視野可視化の試み

桔梗ヶ原病院

園原 和樹

【背景】脳血管障害の後遺症の中で、視覚に関連した症状として半盲（視野欠損）と半側空間無視がある。半盲と半側空間無視はいずれか一方の症状が単独に出現する場合と、2つの症状が同時に出現する場合があり、リハビリテーションの現場では半盲と半側空間無視の鑑別が困難なケースを経験する。また、過去の報告では半盲は運転能力に影響することが指摘されているが、現在の日本の道路交通法では半盲患者の運転可否について明確な基準は存在しない。

視野を測定する方法には動的視野検査と静的視野検査の2つが存在する。視野検査は眼科学領域を中心として発展してきた検査方法であり、視野検査の結果から（A）患者の視野を現実世界に重ねてイメージすることが難しい、（B）視野欠損が運転能力に与える影響を推察することが難しいとの課題が存在する。

【目的】今回我々は、健常ドライバーが運転している時の視野を可視化することを目的として、普通自動車を用いた視野角度の計測を実施した。

【方法】実際の方法は（1）普通自動車10台を対象として（軽自動車、SUV、大型自動車は除外する）、（2）評価者が運転席に座り正しいドライビングポジションを取った後に、（3）真正面を見た状態において視野角度4カ所（フロントガラス上縁と下縁、左右のサイドミラー中央）の測定を行い、（4）得られた視野角度の平均値を算出した。

【成果】得られた視野角度の平均値をもとに、車の内面図と視野を重ね合わせた「健常ドライバーにおける運転時の視野」の画像を作成した。

【結論】健常ドライバーにおける運転時の視野を可視化することで、患者の視野を現実世界に重ねて考えることが可能となった。半盲患者の運転支援を推し進めるために、視野欠損が運転能力に与える影響についてさらなる検討が必要である。